

友愛主義社会綱要（グリユンドリセ）——その一

小林 彌六

資本主義と社会主義の行詰まり

本稿の主題は端的に言えばポスト資本主義、ポスト社会主義の理論と思想を定立することである。資本主義と社会主義の二つのイデオロギーを止揚し新しい受け皿となる理論・思想を定立することである。二十一世紀以降に向けて人類解放（エマンツイパツイオン）と人類「存続」のための新思想の定立を目指すことである。

地球人（人類）が内在する神性に目覚め、その神性を原理にしかつ実体と認識して神性を原理にする社会改革に向かうべき歴史の新時代が来ている。新時代への移行を明確に示すエポックメイキングな事件は一九九一年八月二十四日のソ連邦共産党解体宣言（ソ連邦最高会議による）である。筆者は近年この第三の新ヴィジョンを提唱する努力を重ねているが、本稿ではそれをさらに具体化して記そうと思う。

一口でいえばこれは全人類を地球市民として自覚し全人類の「存続」の問題を他のすべてに優先する解決課題として認識し地球と人類の「共生」を目指す思想である。宇宙と地球と人類の視座からする、人類新時代への改革・救済

の思想である。

現在世界的に「イデオロギーなき混とんの時代」(キッシンジャー『世界はこう動く』)であると嘆かれ、心理的不安と空白・知的アノミーが広がっている。とはいえ旧世界の枠組みが崩れ落ちつつあるこの世界的な激動と混乱の中で、人類が目指すべき新たな理想は定立しうるのである。またされねば人類の存続が危ぶまれる。

(註) 「新『連合』と政権交代」(『国会月報』国会資料協会、一九九〇年四月号、「政界再編成への一提案」(同上五月号)「国民的新党結成への一提案」(同上、一九九〇年十一月号)「第三の道 友愛主義社会のヴィジョン」(『HPS』一九九〇年十二月号)「宇宙からの帰還・ソユーズ篇」(『国会月報』一九九一年四月号)

ゴルバチョフの「新思考」によるベレストロイカ、グラスノスチ、「新思考外交」による大胆な改革は冷戦の終焉とソ連並びに東欧諸国の民主化・市場経済化ないし資本主義化を生んだ。まず、東欧諸国の民主化と市場経済システムへの変革が起りワルシャワ条約機構が解体した。ソ連邦についても一九九一年八月十七日〜十九日にかけての保守派クーデターの失敗を契機に共産党解体という事態が起り、複数政党制と企業の民営化を伴う市場経済への移行が決定的になった。こうしてソ連・東欧では共産主義体制にピリオドが打たれた。政経分離の中国ではこの激変に直面し天安門事件が象徴する強権政治にも不安定要因が増していることは否定できない。

これら一連の事実は共産主義による社会改革(政経の民主化と倫理化)が極めて困難だということ、やや強くいえばそれが失敗だったことを示している。少し具体的にいうと移行期の混乱の中にある現在でも、共産主義を捨て資本主義に移っているハンガリー、ポーランド、東独の状態は相対的には良い。これに対し共産主義(社会主義)の枠を

守っているルーマニア、ブルガリヤ、ソ連、北鮮の方が不調や混乱が続いている⁽⁴⁾。

既成の社会主義（共産主義）は残念ながら事志に反して失敗だった。中国・北鮮等では今後もマルクス・レーニン主義的な社会主義を守ろうとするだろうが、その場合西側諸国に比して不調が続くのは避けられぬだろう。もちろん既成の社会主義国はマルクス・レーニン主義の原則に照らして建設されたもので、社会主義そのものとりわけ社会民主主義そのものと同一視できない。しかし東側諸国での実験が無惨な失敗に終わったといつてよい今、それが九十年代から二十一世紀以降についても失敗の証明として社会主義運動・社会民主主義運動の上にマイナスの錘として重くのしかかることは否定できない。また社会主義は没個的な集団主義に傾く傾向があり（個と自由の軽視）高次元の人間本性と不調和な面があることを自覚すると、共産主義ないし社会主義が朝明けの太陽のような光明ある希望の理想たりえないことが理解される。

社会民主主義も資本主義と共産主義を足して二で割ったようなもので内容が漠然として不十分で、いささか強くないばもはや人類新時代をリードしうる強力な理念・理想たりえない。より高次元の改革思想への止揚と前進が必要であらう。

(註) 大野喜久輔「ソ連・東欧の経済改革」『世界経済評論』一九九一年三月号 等を参照

では資本主義ははたして勝利した（F・フクヤマ）のだろうか。答えはノーである。一例をあげよう。マクロ宇宙・地球の観点から見ると人間の動物性を軸に物的な私益無限追求を中心にするこの経済制度の回転循環（科学技術利用

の)がそのまま放置されると猛烈な生態系の破壊と大気汚染やオゾン層破壊が進み、またそれが極度の資源浪費型社会、核戦争・ハイテク戦争の社会制度であることから早晩、人類の自滅・衰亡を生み出すだろう。このことから資本主義が倒錯せる狂気の社会制度であることは多言を要しない。人々はこの点を直視せず、また直視したくない心理で日々徒らに自己の目先の快楽追求や富と権力の獲得・追及に眼をやり、短視眼的に考え行為しているにすぎない。

確かに資本主義は他の経済制度に見られぬ巨大な経済力の発展を実現した。だがこの制度の欠陥の一つはそれが成長のための成長―蓄積のための蓄積を繰り返し、資源と労働の隠された巨大な浪費を内蔵していることにある。倒錯した資本の無限蓄積のためにかげがえない地球の資源が乱獲濫費されつづけて今日に至っている。近代経済学の主流はこのことを殆ど無視している。資本主義の弊害を直視しようとするマルクス経済学も在来概してはこの事実を直視していない。資源問題を見つめる姿勢がおしなべて乏しかったのである。

資本主義という社会制度は地球資源の乱獲・乱費の制度つまり地球破壊の制度である。資本主義はまた、おびただしい物的消費と快楽享受は別にしても人々の人生の浪費・人生の空費を強制する。また日米の財テク・金融傾斜(現在のバブル経済の崩壊と証券・金融不祥事がこれを示す)に見られるように、経済構造の歪みが進行している。さらに湾岸戦争及びその後の兵器更新競争、さらには局地紛争への大国同盟による武力介入の新秩序への傾斜(米主導)に改めて示される通り、資本主義の制度では先進国並びに途上国(第三世界)での戦争のシステム化―プロジェクト化が成り立っていることが良くわかる。ハイテク兵器等による人類の大量相互殺戮のビジネス化(収益化)をともしう点で、資本主義に大きな欠陥があることを忘れ去るわけにはいかない。

冷戦の終焉による米ソ二極構造の終結、資本主義と社会主義の体制差の相対化、世界の多極化・割拠化が進み、そ

の中で政治・経済の事件多発化・激動が起こる。資本主義と社会主義の双方のゆきづまりの中で、かつての古典的な帝国主義時代の戦争と同じで大戦争への水圧はジリジリと上がっている。

そのような危機的状态から脱出するために今、ポスト資本主義、ポスト社会主義に向かつて資本主義と社会主義(共産主義)との両者を止揚する「人類存続」のための世界的運動の受け皿となる社会改革の新理想が強くもとめられている(註)。

(註) 本稿の付録として末尾にエッセンスを記したレジюмеを付して置く、参照して頂きたい。友愛主義社会のヴィジョンは一九九〇年から九一年にかけて『国会月報』(国会資料協会)に執筆した政経面での諸論稿の中軸に据えられている。またその概要は『HPS』一九九〇年十二月(生活・生産性研究集団刊)に記載されている。本稿はさらにその細部に立ち入ったものである。

資本主義観の前進

さて資本主義の経済・政治制度とはどのようなものだろうか。現代の知的・精神的地平においては、在来の理論・思想に捉われぬより深く掘り下げた追及が必要になってくる。このことは資本主義イデオロギーの限界が露呈されており、私共はその地平を超える認識を迫られているということである。結論を先取りして言えば資本主義は物理的に「地球と人類生存の天井」に突きあたる寸前である。人類の死滅と地球の砂漠化を生む寸前なのである。

資本主義と市場経済システムは即同一ではない。資本主義の核になっているのは利益の獲得をもとめて行なわれる企業活動あるいは経営活動(現在はビッグビジネス中心)といつてよい。これは常識的について、あるいはいわゆる

ブルジョア・イデオロギーにとつてはなんの変哲もない当り前の事実である。近年はまた社会主義国でも市場経済システムのメリットが強く注目されてその導入が中心問題として実行されている。利益をもとめることが経済活動の活性化や効率化につながるという事実もある。そのために企業による利益追及が何たるかについて問い直しがおろそかにされる傾向もある。経営者や大株主（資本家）と勤労者の格差・相違が持っていることの意味について、各種企業内やビッグビジネス支配の経済構造での集権制と民主化との関係についても、改めて問い直そうとする気運が乏しい。労働ないし労働力の商品化にともなう労働疎外・勤労者の人間性疎外・酷使や過労死についても本腰を入れて追及する気運が薄い。残業続きで企業内民主化や参加がなくても、ある程度の給料が貰えてレジャーや消費生活が楽しめるばよといった様子である。日本では他の諸国にくらべ例外的に高成長で好景気続きのために余計にその風潮が強い。

ついでにいえばどの経済学でも通常労使が対等な立場で労働ないしは労働力を売買する、労働市場では契約の主体は対等だと考える。この同権性の前提自体が非常に非現実的であることに目をやる必要がある。雇傭側と被雇傭者との間では資産の大小やその他の経済力等で非常な格差——非対等性——がある。しかも企業間の競争と勤労者間競争では激しさが段違いなのである。同権化を目指す労働組合活動の重要性の根拠がここにある。

さてこの制度の欠陥はこれまでもいろいろ指摘されている。市場の失敗や外部不経済（公害等）が説かれもする。マルクス（ヘスラ）によると貨幣物神（フエティシズム）だという批判も行なわれている。

(脚) なおマルクスやエンゲルスらは持ち前の徹底性から勢いあまって貨幣や商品性悪説や私有財産根本矛盾説にまでエスカレートしてしまつた。それが国有化や社会主義計画経済への誤つた信仰を生んでしまつたのである。「資本論」の論理は学ぶべき点が多いが、上記

のような根元的な誤りも犯されており、それが革命による私有財産制の廃止という共産主義革命理論の誤謬を生み歴史上も思想上も各種の悲劇を生むものになった。このことを今は明確に指摘しマルクス経済学自身も是正の努力をすべきだろう。

この点について筆者は市場経済のメリットを評価すべきだということを九年程前に執筆している(「商品経済観の見直しをめぐる一試論」『筑波大学経済学論集』第十一号、一九八二年)。なお既成社会主義の官僚制支配や経済の非効率化については拙著『資本主義と社会主義』御茶の水書房、一九八一年)やその他の雑誌論文等で指摘してきた。その後何年かしてペレストロイカが東側の気運になった。

ただ在来の資本主義批判ではまだ浅く、現在では文明的に見てももつと掘り下げた根元的な認識がもとめられている。この僅か四〇五百年間で——とくに二十世紀に——資本主義は「人類と地球との共生」の天井にぶつかる少し前まで資本(ストック)と技術と生産力を巨魔的に膨張させた。その結果人類は存亡の成否をかけてこの事実を直視し反省せねばならぬ処まできてしまった。ミクロ的、微視的にはそのことがまだピンと来ない人が多いかもしれぬ。だが地球——太陽系の摂理からいえば明らかにそうなっている。

私人類は何兆分の一ともいえる微少な確率の針を通り抜けることがゆるされて、たまたま太陽系の中の一つの惑星である地球という「一つの家」に生きている。そして現代では企業活動・営業活動をおこない、地球を母として日々生産や消費などの活動をし全体として資本主義システムがある。その全体像の認識がまだ不足している。つまり存在論と宇宙や地球の条理にてらしての全体認識がまだ足りない(註一・二)。

(註一) この点については拙稿「宇宙からの帰還・ソユーズ篇」(『国会月報』一九九一年四月号)を参照、ポールディング『ゼロ成長の経済』、またエコロジを重視した文献として例えば永安幸正『経済学のコスモロジー』(新評論社刊)その他参照。

(註二) 因みに筆者が以前明らかにしたように社会は経済・政治・社会・文化・技術等の種々の要素から成り立っており、経済一元論ではすまない。このことは八十年代に筆者がおこなった歴史観・社会構造論・世界観研究に詳述されている。「史的唯物論の適合性」(註一)。

(甲)、(乙)、「史的唯物論の適合性」(同・同上統論(一)、「筑波大学経済学論集」第十二、十三、十四、十七、二十号所収)

現代資本主義社会について一番目立つのは、それが欲望・我欲追求と充足・消費のシステムだということである。さらに具体的にいえばそれは物欲追求(A・スミスに従えば愛Love)のシステムであり、権力追求(T・ホッブスによる「万人の万人に対する闘争」)の社会であり、地位欲(ステイタス・ポスト)名譽欲・性欲等の満足追求のシステムである。人々や企業や国家は地球上でモノ・金銭・権力・地位・名譽という稀少資源を追って餌を追う獣のようにうごめき争っている。別言すれば我欲充足・追求のシステムである。人々はこれらの物的な稀少資源(地位やポストや名譽等は勲章と同じで人為的に増やすこともある)を人より多く手に入れるのが人生の幸せで人生の成功だと思っている。いわば唯物的な「価値観」を知ってか知らずか採用している。一般化していえば人より多くこれらの資源を獲得したいと感じ希い行動する。いわばゼロ・サム社会である。現代社会はこれらのモノの多寡(それによって充足される快樂pleasure)によって、私達の幸せが左右され人生の価値が定まるといふ、地上のモノ信仰・モノを神とする偏った顛倒した世界である。精神的な価値・文化的な価値を忘却して、欲望満足・快樂 \parallel 物がすべてだと考える我欲追求・充足オンリーの価値観を採用している世界である。

付表にも記したが経済学について見ると、企業の利潤極大化行動 \vdots 生産量の決定(経済学の公準である)や消費者の効用極大化(消費者行動の理論 \vdots 無差別曲線)をいわば自明の原理として、それらのことの倒錯性(\parallel ホモ・エコノミックスの倒錯性)に殆ど注意を払わずにミクロ経済学やマクロ経済学が数学的に組み立てられている。倒錯による経済行為の均衡を説いている。非人間的に逆立ちした均衡と正当性を説いておりしばしば倒錯性進行の正当化・体

制正当化の論理としても利用される。

実際の個別経済主体の意識や行動もこれに近いかたちで動いている。企業の蓄積につぐ蓄積、投資につぐ投資の無限反復もGNPと生産力拡大の無限追求も物や金銭に対する貧欲な追求の姿である。いわゆる近代経済学は一般にこの利潤・利益追及の異様性をあまり理解しない。あるいはそこにあまり関心を払わない。マルクス経済学は搾取によると解する利潤の無限追求を批判的に見るが、物の豊富への追求を素朴に肯定しその限りで物的生産力増進至上主義に傾いている。利潤追求の行為が人間にとって意味するものは何かを真に掘り下げていない。

資本主義社会では人類にとって元来は「道德外的」なものとされた「ひたむきな貨幣獲得」(M・ウェーバー)が経済活動の大きなモチーフになっている。貨幣は交換価値の象徴ともいえるけれど、それがあれば多種多様な財貨とサービスと権力を入手できるという事実が貨幣に特別な意味を与えている。貨幣の成立をマルクス経済学が説くように価値表現にもとづく価値形態と考えようと、経済人類学(ポラニー『経済の文明史』)が説くようにコミュニケーションのシンボルと考えようとその点に大差はないといえる。

貨幣はモノ(物)の代表物であり人々が貨幣をもとめるのは、ひたすらモノを求めていることになる。財貨・物質に極めて大きな価値があり物だけが私達を幸福にする、私達が幸せだということは沢山の財貨あるいはサービス(他人の)あるいは他人への指図・支配を消費できることによる。そう大多数の人々が素朴にかつ心底から感じ信じ込んでいる。人生の幸福は物の増加関数だと思込んでいる。人生にはモノ(物)の多寡とは別の高尚な内的・精神的な幸せや価値があることを殆ど考えない。奇妙な唯物主義の限らない風潮が社会を包んでいる。さすがに昨今は心の渇きや不安を感じる向きが多く、我が国でも「物より心」への傾向があるといわれもするが、心の満足と物による満足

とがゴチャゴチャにされている傾向がある。

政治システムについてはどうだろうか。我が国の現状に極度に強く示されている通りカネや利益誘導による票の掻き集めが行なわれ、政治家間では金銭やポストの利益誘導を手掛かりにする派閥形成が起きる。悪くすると各種の利益供与とひきかえに政党ごとの抱き込みさえも起きる。資本主義社会の政治システムでは民主主義（ひいては大衆民主主義）や議会主義をとる場合でもいわば金権政治が支配しやすく、軍拡と戦争がビジネス化される。マルクスがいふブルジョア政治ひいてはブルジョア民主主義と云われるものがそれで、現代ではビッグビジネスと政官の癒着が生じやすく富者のための政治になりやすい。資産や利権をつうじ政治権力の掌握が起きやすく、富者のための（時に弱者を犠牲にする）政治がおこなわれる傾向がある。行政・立法・司法についても公正性が疑問視されることも多い。

公共性の活動と考えらるべき政治が権力、物質、ポスト、名譽心の満足等の我欲充足追求のために利用されやすい。K・ポールディングは米国について最上層の1%があらゆる富の1/3をもっており、「基本的な決定は超富裕者層スーパールッチによってなされるのであって、政治的力はたんにそれに手心を加えることしかできない……」（『ゼロ成長の社会』）と嘆いている。米国でさえこの有様である。

資本主義社会では経済システムのあり方が社会状況に対し強い規定力をもつといつてよいが、上記の通り政経両面でもひいては社会的にも各種の私的利益の追求・我欲追求が露わである。スミスは国家ではモラルセンチメント（「道義心」）が働く。経済的には利益追求で調和的になる、それでうまく行くと唱えた（『国富論』『道徳情操論』）。だがリカード、マルクス、ウェーバー、シュムペーター、スウィーージー、ガルブレイス、ポールディングその他多くの学者・知識人が考えたように、貧富の差からくる歪みその他で経政社などさまざまな面に生じる歪みや弊害が極めて大きい。

すでに述べたように成長の無限追求、GNP至上主義と大戦争への強い傾斜は物的に見ても地球環境の壁にぶつかるまでに大きくなっており、また人類の「存続」の危機（ゴルバチョフ）にきている。さらに人々の心身に及ぼすマイナス影響は大きい。精神的荒廃が人々の心、社会や各種の集団や組織を黒く蔽う有様は誠に目を蔽いたくなる程である。このマイナスのGNPとマイナスのストック化の実相が今は明確に自覚されねばならない。過日ソユーズ号で天空から地球を見たTBSの秋山寛之氏は東京を見て思わず「コケが生えたような…」と表現した。強く顧慮すべき言葉だと思ふ。

さて人間の動物性の全面解禁・動物性を中心にする資本主義では、各種の我欲の無限追求によつて人々と地球が汚染・破壊され続けてきており今もまたそれが進行中であつて、資本主義の欠陥は明らかである。この社会システムの欠陥は目に見える物質・モノ（例えばGNPや成長率や効率〈efficiency〉や資源配分の効率性やテクノロジ）の拡大発展の側だけから見ているとわかりにくい。近來はもっぱらそのような側面から計数的に見えるもののみを信じるきらいがあつて、そこにおとし穴があるともいえる。

もしプラトンが説くように肉体と魂（心）が別のものだとすると人間は身体と心（魂）との複合体といえる。人間はたんなる物質なのだろうか。たんなる肉体なのだろうか。身体は三次元の存在であるが魂は別の次元の存在でありうるかもしれない。三次元以外の別の次元があるのかないのか。ないという考えのほかにも、あるという考えもありうるかもしれない。ないと判定できるか、あるといえるかどうかの問題が、現代の最先端の思想と科学で大問題になっているといつてよいように思われる。そしてこれは存在論に関わる古くして新しい問いといえる。人類史を振り返ると肉体と魂は別のものだという二元論が圧倒的に永い年月支配的だった。その中で心身一元論いわば唯物論（デモク

リトス以来の)は元来が非常な少数派でありまた最近の何百年か(特に十九世紀(産業革命)後)に幾分か広がりを見せたが(マルクス・エンゲルス・レーニンの唯物思想とデカルト以降の科学思想の一部)、二十世紀末の近年は科学思想等でも唯物論で通せるかどうか再び大きな問題になりつつある。

科学では今日宇宙の発生をいわゆる「ビッグバン仮説」(百数十億年前)で説明しようとする考えがいわば常識化している。宇宙は微細なるものから爆発によって膨張し今なお膨張しつづけているという。そして現代の宇宙科学や物理学・生物学・化学や人間学によると宇宙の一星雲である銀河系の中の一天体・太陽の一惑星上に各種の生命体が生じ人間が生じたことは、まさに奇蹟の連鎖つまり無限にゼロに近い確率によるといえるようである。宇宙科学その他の先端科学の目から見ると宇宙はむしろ相対化され、地球という水惑星の形成や人間の発生についても設計者がいるのではないかという感さえ濃厚である。

この辺の宇宙論と人間論と存在論に関わる筆者の研究の一端は先般、拙稿「宇宙からの帰還・ソユーズ篇」(『国会月報』一九九一年四月号)で記した通りである。いずれにせよ社会体制論や各種の社会科学や社会問題も(もちろん経済学も)「人類存続」・存亡・が問われている危機の時代に、これらの存在論のテーマや人間本性論を抜きにしては十分に論じえない。その論点を人類が二十一世紀に向かう視座で真剣に考えねばならぬ処にきている。社会・世界・人間・政経・文化に関わる論議も宇宙論や地球論の視座から考えねばならぬことこの自覚が今強くもとめられている。

このような観点に立って人間本性を考える時、古来プラトン、アウグスチヌス、カント、ヘーゲル、キリスト、釈迦ら多数の諸聖哲が繰り返し人類に説き理解させようと努めた考えに従い、人間は身体と魂の二元的な存在だと考え

るのもあながち不思議ではなからう。一つには動物的な諸欲望・貧欲・悪徳（動物性）と人間的ないし神的諸欲求（ノールな神性）とが対照的でありすぎる。個々人が動物的（肉体的）であるのと同時に神的でもあり、両面が際立つて対照的である。十九世紀のマルクス・エンゲルスやダーウインのように素朴に唯物論的に割り切りすぎるとこの辺の処が見えにくくなる。

マルクスもヒューマニズム（人間主義）の観点に立つ。またその観点から現実世界において人間解放（エマ・ツィ・パツィオン）のための理論と学説を構築しようとした（—上述の通り今はプロレタリアートの解放（『共産党宣言』）ではなく、人類救済・人間の動物性からの自己救済運動の新思想の定立がもとめられているのだが）。その結晶が『資本論』である。十九世紀後半から近年ゴルバチョフにより（いわばゴルバチョフ主義によつて）上からの革命と解放・ペレストロイカ（改革）が開始され、ワルシャワ条約機構が解体され（一九九一年七月一日）、ソ連邦共産党の解散宣言がおこなわれた（同年八月二十四日）いわゆる「新ロシア革命」―「六月革命」まで、マルクス・レーニン主義は人間解放（といつてもプロレタリアートの解放）・ヒューマニズムの有力な指導理念だった。

しかしマルクスやエンゲルス（その継承者とされるレーニンら）はいささか性急・安易にフォイエルバッハのヘーゲル批判（『将来の哲学の根本命題』『唯物論と唯心論』）にのりその範にそつて唯物論を展開した。物質一元論、身心一元論をとり宇宙と地球・世界の設計と創造・形成の未知の領域に分け入り探究する視座を狭め、結果として孤独で有限な（死をまぬがれぬ）不可知論や視野狭窄の自閉的な世界観に閉じ込めたといえぬ面がなくてはならない。主観的にはより広き視座を拓き世界観の解放という事業をおこなうのに、生涯にわたり卓越した才能を用いずさまじい努力をしたのであるが皮肉な成り行きになったのである。これは一九一七年のレーニンによる「ロシア革命」が一九九一

年六月のクーデター失敗によって、ゴルバチョフ・エリツインらによる「新ロシア革命」によって清算されねばならなかったことと対応するといえるかもしれない。

人間は身体をもつがゆえに肉体的諸欲望（悪徳）につながれている。しかし他面で精神・心・魂（soul, spirit）においては宇宙と地球と生物等の設計者いわば神の心につうじるものを持っている。この辺の事情の根元的な認識が大切になる。宇宙生成と銀河系発生と太陽系と、太陽を巡る水惑星地球の公転のいわば百万分の一の確率（つまり偉大な設計と創造）の針の穴を通りぬけて日々私達個々の人間は生きている。人類も生存・存続・増加し社会も成り立ち政治・経済・文化も成り立っている。人類の生存は紛れもなく地球・太陽等の奇蹟的なバランスが維持されている限りにおいて許されている。この奇蹟のバランスが崩されれば人類（私共個々人）の生存はたちまち危うくなる。

この視座から資本主義世界の経済システムや政治システムを見てみよう。資本主義システムでは人類史上かつてない程グロテスクにあらゆる欲望・エゴイズム・自己利益・モノ・我欲・我執がはびこり、まさに終末論的な世相を呈している。各個の人生は所詮は張り紙細工の物の獲得努力で終わっている。

やや強くシエマティッシュに総括するとこのシステムは人間の身体（肉体）から発する我欲追求と我執をエンジンにする悪徳の社会システムである。人々が真の人間性を殺しいわば悪夢的に動く汚濁のグロテスクな社会システムであって、人類史上これ程までに社会が世の中が隅から隅まで欲望によって目張りされている時代はなかったといつてよからう。いずれの時代にも愛情、友愛、公正、正義、道徳といったものがどこかに根を張っていた。資本主義社会では企業も個人も他人（と地球）を削り取って消耗させても自分が物の面で得をすればよいというエゴイズムと欲と悪徳を原理にして行爲している。古典派経済学も新古典派経済学もこの事実を直視せず、悪徳の行爲を人間や企業に

とつて非常に合理的で正当な行為であると説明し教える。いささか強く表現すると黒を白に塗りかえる現代流の技術や理論である。マルクス経済学は資本主義が誤つた制度であることを書き出しえているが、私有財産制による物での不平等（貧富）にのみ注意が注がれすぎてまだまだ認識に浅さがある。

儲けるためには他人を人間と考えず道具として扱つてその心身を搾り取つても、他国を威嚇して意に従わせたり侵略して植民地化したり（新旧植民地主義）、兵器を大量生産し計画的に戦争を実行（戦争のシステム内プロジェクト化）してもてんとして恥じない。戦争は平和のため、正義のため、「国際的貢献」のためと詭弁がもてあそばされる。もちろんこのような社会でも人々に良心のうずきはある。良心的な人々も数多い。相互愛や正義や美をもとめる良心や理性いわば人間本性の善・魂から発する行為もある。しかし利益追求・我欲追求の動物的行為が圧倒的に多くまた力を持っている。美德と悪徳の争いにおいて悪徳が優勢を保っている。改革派と保守派のせめぎあいでは保守派（共産党・KGB・軍などのいわゆるノーメンクラトゥーラ）が優勢を保っていた「新ロシア革命」（一九九一年八月十九日〜二十五日）前のソ連邦と状態は同じだといえよう。

シエマティツシュに言えば資本主義の経済システムはじつは「悪徳の社会システム」、動物的な私利・我欲追求をエンジンにする「悪徳の国」、悪徳の大量生産のシステムなのである。

経済学と社会改革思想の革新——修正資本主義と社会民主主義の境界

これまでの諸学と思想ではこの根元的な事実の認識と確定がまだまだ不十分だった。言葉を換えると存在論・人間本性論に周到な目配りをするを根拠にする根元的な社会システム論・社会体制論・制度論が欠けていた。経済学についていうと近代経済学はおおむね企業が利益追及（利潤極大化）するとか（効率的な資源配分——パレート最適と

か)、消費者が効用(満足)極大の方向に財貨の購入を選択するということからスタートする。したがって懸案とされている人間本性論や存在論の知性的な深い追求がなおざりにされている。マルクス経済学ひいてはマルクス主義・レーニン主義も漠然と人間性善説をとり、その面で人間本性の動物的側面や人間の道徳的發展がまだ不十分であることを見落しており、また安易に唯物論(マルクスとエンゲルス)をとっている。もつともある意味では上記の存在論に力を入れており、それが特徴だとも伝えられてきた(エンゲルス『空想より科学へ』)。後世の賛同者はそれをう呑みにしてきた観があるが、この世界観はまだまだ単純で掘り下げが足らずあえて伝えれば十九世紀風のいささか安直で強引な自己了解にとどまっている。それは付加価値形成や価格決定を労働価値説によって説けるしまた説かねばならないとするいささか古風な価値理論の安直性にもつうじるといえよう⁽⁴⁾。

(註) 「価値の形成と価格の決定 人間解放の経済学の学的再建のために」(『筑波大学経済学論集』第二十五号(一九九一年三月))「経済原論の一試案(その一)」(同上一九八八年十二月)などを参照

存在論や人間本性論に関連づける研究が浅いことが近代経済学に計数とモデルと方程式による表面的な物的均衡(一般)を迫りもつめそれに安住する学問にとどまる傾向を付している(もつともJ・S・ミルらは人間本性論に目配りをしていただけだが)ように思われる。それは個々人にとって経済行為が何を意味するかを探究せず、多くの場合均衡決定いわば物的な均衡や効率化を説くことに安住する。いきおいその均衡が悪徳に根ざす根元的な不均衡つまりマイナスのGNP生産システムであることに省察の眼を向けようとしな

我欲（悪徳）の均衡＝大いなる毀滅

マルクス経済学もいささか素朴で短絡的なすべて物論で、人間本性論の探究を奇妙といってよい程に欠落させたままの論理構成・学問構成になっている。このことがポスト資本主義の社会改革構想と改革運動に大変なつめの甘さと誤謬と分裂抗争の原因を生んでしまった。

ここに吾々の前に課される二つの課題がある。(1)人類解放(エマンツィパティオン)、人類救済の学として悪徳の経済と政治システムの構図を明確に分析するものとして、政治経済学を発展・再建する事業。(2)後述するように悪徳の社会システムを変革する新たなヴィジョンを創出する事業である。筆者はこれらの二つの作業を進める構想を持っている。

さて一九一七年の「ロシア革命」から一九八五年のペレストロイカ開始、一九九一年八月の「新ロシア革命」までの人類史の実験は暴力革命によるプロレタリア独裁(いわばクーデター)によって生産手段を国有化(共有)し計画経済化するという社会改革ヴィジョンの誤謬をあますところなく実証した。人類はこの苦勞多き実験結果を直視して忘失してはならぬだろう。一九九一年八月十九日からの保守派クーデターの失敗とソ連邦共産党の解体(レーニン像の撤去)の衝激的な事件を直視すべきだろう。社会改革思想の再建のためにも、今はあえてそういわねばならぬ。ついでながらマルクス経済学も旧守的、保守的な姿勢をとりつづけるわけにはいかぬだろう。その本来の人類解放の志に目覚めて自己改革に取り組むべきだろう。公式や教条の繰り返し返しはどうしても学問を墮性に流れがちにし膠着させかつ退歩させる。新鮮な魅力を失わせる。仲間うちだけの会話に流れがちになって時に独善に陥ることもなしとし

ない。筆者は四十年間ひたすら他の諸欲望を絶つて、学問研究をおこない。思索を積み重ね世界と日本の観察をおこなつてきた。その蓄積の上に立つて、今学的再建のためにそう判断せざるをえない地点に到達したのである。他意はないが、あえて記す次第である。

マルクス・レーニン主義では人間本性論・存在論の本格的な研讀が非常に不足し、徒らに過去の知的遺産の否定のみが強かつたために社会改革論において過激な集団主義、復古的な共同体社会への指向が生じ、資本主義の欠陥が生産手段の私的所有・私有財産制や市場経済（商品経済）にあると判断した。平等性への強い指向（自由や友愛というよりは）も生じた。社会主義がそのような方向に強く牽引された。とくにマルクス・レーニン主義では階級闘争が軸になる改革論のかたちをとつたので、改革が強い敵視と憎悪を要素にするものとなり鉄の統制（前衛による内外への「中央集権主義」―レーニン『国家と革命』）を生んだ。国有化と計画経済への切り換えは、官僚的集権性（例えばメドヴェージェフ『共産主義とは何か』E・H・カー『ロシア革命』）と大衆の無気力と非効率化を生んだ（この点については先年拙著『資本主義と社会主義』へ御茶の水書房に記した通りである。その後十年経つて今日ではこれは世界周知の事実になった）。

人間性の現在の発展段階では（J・S・ミルは「人間的進歩の思想」を掲げた）、ナイーブな集団主義・共同体社会主義（アリストテレスのオイコスやトマス・モアの「ユートピア」、オーエンの友愛的資産共同体）は総メンバ―が人格的によほど成長しておらぬ限り(1)官僚的支配・独裁と(2)無責任・無気力を生み出す。

資本主義の欠陥はそれが商品経済（市場経済）や私有財産や個人の自由な活動をベースにする点にあるのではない。その証拠に現在のソ連・東欧諸国・中国等では市場経済の活用に経済再建の活路がもとめられ、国有企業の株式会社

化や民営化への切り換えや私営企業の創設が大きな事業になっている。大スケール（分業と協業）の経済運営には市場メカニズムの活用も大切だし、人間の自己実現欲求に即していえば経済活動における個人の自由も大切で、その裏付けになる私有財産もかなり認められねばならない。私有財産や企業が即悪だというわけではない。

これまでの勤労者や庶民よりの社会改革論の中心であるマルクス・レーニン主義や社会民主主義では、資本主義の欠陥に対する切り口が大きくは三つだった。即ち財産所有における不平等、持てる者と持たざる者との隔差や矛盾の是正。二、持たざる者の救済。三、持たざる者の互助協同ないしは組合活動・国家政策ひいては国有化や共同体的社会形成。社会主義はいわば貧しき者（失業、不況、植民地化や戦争）弱き者いわばプロレタリアートの救済・向上の思想だった（『共産党宣言』（現在もとめられているのは人類の一部分の救済ではなく、人類全体と地球の救済である）。この角度から特有の徹底性で突き進んだのがマルクス・レーニン主義的な改革理論である。すなわち資本や工場・農場などの生産手段の私的所有の廃絶と公的所有（国有化）への切り換えを改革のスローガンにする。市場経済と計画経済とでいずれが優れているかの吟味を精密におこなわぬままに計画経済への移行（大スケールの）を基本方針に掲げる。

社会民主主義のかなりの部分に共同化（ないし協同化）国有化や国家統制（つまり大きな国家）、あるいは勤労者（のみ）の自己救済、弱者の団結や援助をもとめる運動をイメージする部分が多い。直接的な協同化、国家統制、国家政策、国有化等ハードなイメージがする側面がある。もつとも労働組合運動や各種の互助協同の組合運動は元来は友愛を原理にする互助・協同の運動で自由をとまなうソフトな感じはある。したがって上記はあくまで概括的な印象である。弱者の互助・団結と国家の再配分政策というニュアンスがあるので、修正資本主義の改良方法にくらべると自由の要

素が減じるのかもしれない。この辺りには協同（集団）を軸にして改良・改革を進めるのか、自由をベースに調整によつて改良を進めるのかの微妙なスタンスの違いがある。

このほかにも持てる者と持たざる者、マルクス流に言えばブルジョアジーとプロレタリアートとの関係をどうつかむかの微妙なスタンスの問題もある。持てるとは主に利殖のために用いうる資産であつて、それが利潤や利子（賃貸料）や配当、地代を生むもの、つまり資本や土地である。資源の所有（油田・炭田・森林など）も問題になるかもしれない。

一言するならば二十一世紀を目前にする今切実にもとめられるようになってきているのは、階級や国やイデオロギーの差を超える人類の自己救済のためのヴィジョンである。「全人類は『地球丸』に乗りあわせた乗客なのだ」。「人類の存続と戦争の回避という最優先課題」（ゴルバチョフ『ペレストロイカ』）があるのだ。これまでのイデオロギーや改革思想ではもはや直面せる地球人類の難局は乗り切れない。より進んだ広く力強い光輝ある新思想・新ヴィジョンを必要とする。存在論や世界観に裏うちされた新たな社会改革思想の定立がもとめられている。

市場経済システムには元来、自動調整力や自己実現欲求と結びつくメリットがある。それには生産性の上昇等で勤労者の所得が増えるメカニズムがあることがわかる（勤労者の団結や民主政治があれば）とすると、問題は企業活動や市場経済システムの枠組みを保持しつついかなる改革がベストかということである。社会民主主義の改革は勤労者や弱者（いわば労働—プロレタリアート）の救済ないし互助救済活動や権利伸長に力点が置かれるために、ともすれば経済システム全体のマクロの円滑な運営についての目配りや各個の経済主体の自由な活動のもつ意味について配慮が薄くなる。またマルクス・レーニン主義的な計画経済化や国有化の方向への傾向もないとはいえぬ。

組合運動・福祉政策の要求・普通選挙制・大衆民主主義・平和運動等々社会民主主義や社会主義が歴史的に生み出したものは大きい。そして社会民主主義の主張の多くは修正資本主義に吸収され実行されている面もある。さればと云つてそれは資本主義の枠を乗り越える新しい社会システムのヴィジョンをなかなか提示できないでいる。マルクス主義サイドは社会民主主義とは別だがその妥当性については疑問視される。社会民主主義はイギリス労働党やドイツの社会民主党の戦後の歴史からわかるように社会経済の実際の運営の面では修正資本主義に水をあけられやすい。雇傭問題・景気政策・財政運営等も志に反してなかなか良い実績があげられない。労働に厚くしようとする政策が結果として財政や企業・産業レベルでマクロ的な回転を不活達にすることも多い。資本と労働との間に不協和音が大きくなることや、労働コストの上昇や労働サイドの産業・勤労努力低下や資本サイドの消極的な抵抗が起こることもある。ブルジョアジー（有産者）とプロレタリアートという把え方をとるとして、プロレタリアート百分の改革は二十世紀でのソ連や東欧諸国の歴史の実験に見るように失敗に終わっている。それらは市場経済制度や私的経営の方向にウターンしつつある。

私的経済（私有財産制）や市場経済（market economy）の枠組みを残しながらの運営ではファシズムでの失敗を除いてがいて社会民主主義は修正資本主義に水をあけられている。少なくとも短・中期的にはそういえる。社会民主主義では庶民・勤労者の利益が重視される、それは民主・自由・友愛・平等の重視という観点から大切なのだがここに微妙でかつ重い事情がある。資本所有（経営）と政官との繋りとがもつ力の要素がこの点に影をおとっていると見えるかもしれない。これはマルクスの表現に従えばブルジョアジーの経済・政治権力の影響と総括してよいかもしれ

れない。

(註) この点は日本で一番はつきり浮彫りにされている。ロッキード事件、リクルート事件さらに今回の証券金融スキャンダルではわが国の政財界いわばブルジョアジーが政・経権力を水面下の同盟で実質上独占していることの実態が見え隠れしている。別の角度からいえば欧米諸国では民主政治・議会政治・法治主義の原則が重視されるようになっており、政財官によるこれほどあからさまな諸権力の独占は成り立たなくなっている。ブルジョアジーの権力はそれだけ相対化されてきている。

社会民主主義には社会改革思想として修正資本主義にかわってリーダーシップをとるだけの内容が今一歩備わっていない、改革理念として限界があるといえる。

共産主義ないし社会主義が東側で失敗し、西側でもかりに社会民主主義の政党が政権を取っても英仏独等の経験に見る通り修正資本主義のラインを取らぬと政経の運営はなかなかうまく行かない。また社会民主主義は修正資本主義と区別される点があまりないということもできる。

自由と共同(協同)のいづれが強くなる人間の心を惹きつけるだろうか。それは自由である。協同や集団においては個々人はなんらかの意味で他との調整をおこなない一種の規制を受け入れている。自由を原理にする共同と、共同を原理にする自由では、人々は前者に強く惹きつけられる。

これは人間存在の内奥の自由の原理と結びつくもので非常に根強い。また自由が尊重されることで個々人の人格が認められ自由に思い感じ考え、計画作定もでき選択することもできる。各個人の自由は三百万年といわれる永い人類の歴史の中で成長し近世に至って漸く人権として(市民革命によって)公認されるに至ったものである。自由という人権は人類にとつてたんに「ブルジョアの自由」だ(K・マルクス『共産党宣言』)と片付けてしまえない意味を

もっている。最近の例でいえば八月の「新ロシア革命」でソ連の市民達は独裁のかわりに内奥の人間的原理である「自由」を選んだ。共産主義・集団主義よりも自由を選んだ。

十八・十九・二十世紀でも東洋・アフリカ・アメリカ・旧アメリカ大陸では集団主義がまだ支配的で自由は一握りの人々のみ認知されたものでしかなかった。個人の人格の価値とその自由の発見はギリシャ、ローマ以来のヨーロッパ文明と、キリスト教において各個が神に向かいあう神と人間との紐帯の強く深く広範なる自覚と、市場経済の発展が導き出したものといえるだろう。ヨーロッパで資本主義が成立したのはM・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で指摘した精神的エートスと関係があるといつてよいかもしれぬ。筆者は決してかつての欧米中心史観に立つわけではない。また現代はアジアや中東地域・アフリカその他の第三世界の動きが大きな意味を持つ時代になっている。とはいえこのことは近世・近代の人類が大変な努力と犠牲をあがなって生み出した個人の人格性の尊厳の自覚や人間的自由の普遍的認知を、集団の枠が先行し各個の自由・権利・人格がない集団主義の中に埋没させてよいことを意味しない。

集団主義・組織の論理——つまり官僚制と機械的平等——のみの先行は自由——創意努力とその報酬——の魅力に勝てない、また市場システムは自己調整力がある。ここに資本主義に多くの欠陥があるけれどその超克理念である社会主義が資本主義にどうしても勝てなかった理由がある。さらにいえば宇宙・太陽・地球・人間と諸生物の設計者・創造者である大いなる知恵とエネルギー、究極存在を否定してはどのように動き回っても人間は自らの心の冷え込みから逃れることができない。それは丁度、太陽がない処で暖かく幸せに暮らそうとするようなものである。宇宙存在の原理・本義に背を向ける唯物主義は抜け出ることができぬ洞窟を自分で掘って中に入るようなもので、経験できるもの

しか信じないという点で理性的で近代的で賢いようでありながら無限の焦慮にはまり込む道であることを悟るべきではないだろうか。いわゆる近代は人類が自らの五官の経験と自らが作り出す技術や科学を素朴に信じすぎた時代だったと後世に記録されるのかもしれない。

直接的な協同・集団主義や強くいえば共同体社会主義、コミュニン主義は人間解放と自己矛盾し、限界があり資本主義を真に超克する原理たりえない。東西における社会主義ないし社会民主主義の実験はそのことを示す。人類と地球の救済を目指すポスト資本主義の新たな改革は共産主義や社会主義を止揚する別の原理によるべきだろう。肉体に根ざす悪徳の社会システムを魂（アイデア）に根ざす善（美德）の社会システムに組み替える新理念にもついで改革が推進されるべきであろう。

第三の道——人類存続のための友愛主義社会への理念

一口でいえば改革の理念は自由に基づく協同であろう。〈因みにマルチン・ルターは「自由と奉仕」を根本原則とする。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、何人にも従属する」〉（『キリスト者の自由』岩波文庫十三頁）と述べている。

人類史・文明史・文化史のこの段階、別の角度からいえば人間性陶冶のこの歴史段階では、おそらく何百年かに互ってこの方向での改革理念ないしは改革思想が人類・個々人と社会を引きつける指導理念とさるべきだろう。またなるだろう。個を拘束する集団先行主義・コミュニン主義・共産主義はこの段階では前近代の階層制と粗野な共同体への逆戻りにしかならぬだろう。

さて、ポスト資本主義の地球人類新時代の社会改革の具体的方法について述べよう。大きくは経済システムと政治

システムの改革があり、その他の文化・思想・學術・社会の改革もある。改革の基軸になるのは一言でいえば精神革命である。価値観の革命であり我執（物欲・権力欲等の）からの人間解放であつて、それにもとづく經濟・政治その他の活動の実践である。物質的なものより光輝ある精神的なものの価値に目覚めることである。物欲や物的な豊かさ（地球の破壊）よりも精神的な豊かさ・善と愛のGNP産出の枢要性に目覚めることである。すでに述べたように近代の人類は人倫の誑を忘れて物的なものに目を奪われ自らの動物性に操られすぎたがために、自滅の寸前にまできている。そのことが判つていながら各人は日々我執から抜け出られずうつろいやすいかりのもの物的なもの、「肉体的快樂」——ソクラテス・プラトン（金錢・権力・ポスト・名譽・虚榮・評判）——をひたすら追ひもとめている。まさに無限地獄である。物的なもの重視から精神的なもの重視へと、自らの動物性から神性へと価値観を切り換えることが大切である。それによつて他人との動物的な奪いあい・鬭争と妬みの近隣窮乏化から抜け出られるし、自分の心も明るく豊かになる。他の人々は自分の敵ではない、兄弟・姉妹であり盟友である。精神革命のような抽象的なことで世の中が良くなるとは思えない人々はまだ大勢いるだろう。しかし物的なものが人々の心を楽しく明るく幸福にするには限りがある。物的な快樂（ベンサムのいうpleasure）は底が浅く、肉体としては死を免れぬ限りある生命の人間を真に幸せにはしえない。各種の物的快樂はいわば麻醉であり阿片である。また上記の物的なものを多く獲得しても、別言すれば私利我欲を達成し金錢を山積みにし勳章を何十個もらつたからといつて世間で語られるふうにはその人の人生が成功したとは限らない。世俗的に成功したと見える人が人生の眞の価値において失敗しており、世俗的に失敗したと伝えられる人々が実はその人生の眞の価値において成功しているということが実は数多くあるだろう。人間・人類の罪業の多くが物的快樂にたいする強い執着からきている。このことの真剣な自覺の努力が自滅の瀬戸際を歩きつ

づける状態になっている人類に今こそ強くもとめられている。

(1) 経済システム

ミクロレベルからの改革

(イ) 社会制度をさしあたり経済制度と政治制度の二点に絞って考えることにしよう。まず経済システムについて。端的に言えば動物性中心の経済制度から神性を軸にする経済への転換が大切である。個々の経済主体の経済活動を友愛と精神向上のための活動に転換する。各個人の各個の企業や営業の目的を上記のような精神的価値をとまうものに転換する。経済とはこのような精神的価値とは無関係だと思いついていた処に近代の経済観や経済学の錯誤がある。日常の個々の生活実践の場からのミクロレベルからのこのような改革が真にもとめられている行為である。

経済活動は市場経済システムをフレーム（枠組）にする。私的企業が大切な生産・供給の単位であるし、勤労者や消費者ももちろん大切な経済の担い手である。ただし、倫理感を重視する目標の切り換えが大切になる。在来のように私利我欲達成のみが目標ではなくなる。たまたま最近では経済倫理の重視がクローズアップされる気運になっており（例えばR・デイジョージ『経済の倫理——二十一世紀へのビジネス』・山田経三訳、明石書店）、我が国でも企業側でたんなるPRでなく在来の方に反省を加えて企業と社会との関わりを倫理的に考えていこうとする風潮が起きてくる。企業の社会的責任、利益社会還元の社会的貢献や企業文化を考えると、従業員の立場についても企業と社会と個人との関係を考える「企業市民」という視点が唱えられたりもする。「法人市民である企業がその『生き方』を変る……」べきだへ『日本経済新聞』九月二十三日社説、「企業行動憲章」（経団連）という世論も起きている。倫理感

を忘れたホモエコノミックスだけを想定する経済観や経済学にはもはや限界があると考えざるをえず、モラル・サイエンスとして経済学を見直すべきだという新しい気運がある。(一例として池上淳『文化経済学のすすめ』丸善ライブラリー)

筆者がいわんとする改革の理念とこれらの動きはおおむね同一方向にあるといえる。これまで多くの経済学者やエコノミストが企業の目標は利潤・利益の追求だと説いてきた。実業の世界でも企業にとつて(あるいは経営者または大株主等にとつて)その目的は貨幣での余剰の獲得ないしは市場のシェアのアップ等、いわば利益の獲得にあると考えられてきた。利益・貨幣がモノを代表する限り企業は極端に貪欲な拝金主義・唯物主義で活動してきた傾向がある。しかしこの考え方いわば価値感を決して不変の条理ではありえない。企業活動はかならずしも拝物主義・拝金教とイコールであるとは限らない。

—掲載分量の点で続きを次号にゆずる。